

【目次】

研究発表（１）レジュメ（淵田仁氏）	2 頁
研究発表（２）レジュメ（熊坂元大氏）	3 頁
第 8 回学会、佐々木隆治氏の発表への論評（島崎隆氏）	4 頁
第 8 回学会、御園敬介氏の発表への論評（森村敏己氏）	5 頁
第 5 回総会議案書（案）	7 頁
新任教員自己紹介	9 頁

研究発表（１）

改変される自然 ～～ジャン＝ジャック・ルソー『化学教程』における自然～～

淵田 仁（一橋大学大学院社会学研究科博士課程）

本発表では、ジャン＝ジャック・ルソーの隠れた著作である『化学教程 Institutions chimiques』(1747)から読み取れるルソーの「自然 nature」のあり方について検討する。

ルソーにおける「自然と非自然（人為）」というテーマは、ルソー研究史において、古典的テーマであり、いささか凡庸なテーマであると言わざるをえない。例えば、『学問芸術論』や『人間不平等起源論』『エミール』で繰り返し展開されるルソーの反学問性、自然人への愛というモチーフは、彼の基本的スタンスだと考えられてきた。すなわち、「ありのままの自然」こそがルソーにとってもっとも重要である、と。反対に、「徹底的な人為性」ともルソーは深く結びついている。『社会契約論』において、ルソーは一個の理想的国家を描くのであるが、その国家は明らかに「理念的」「理想的」な人為的国家であり、そこに「ありのままの自然」を感じ取ることは難しい。

このようなルソーにおける「自然／人為」の対立は、彼の政治思想的立場における「分裂」をも引き起こしている。すなわち、ルソーの政治哲学は個人主義と全体主義の間で引き裂かれているというのが、我々の一般的な見解である。そして、この分裂を我々はどのように受け取るべきか？これまでの研究史において、大きく分けて二つの解釈が並行して存在してきたように思われる。つまり、「矛盾の人」として、分裂をそのまま受け取る解釈であり、もう一つが、様々なテキストを織り交ぜつつ、ルソーの哲学体系の「統一性」を生み出そうとする解釈である。

しかしながら、本報告では「第三の道」を取りたいと思う。その道しるべとなりうるものとして、ルソーの忘れ去られた作品『化学教程』を取り上げたい。『学問芸術論』を執筆する以前に、一時期ルソーは化学研究に専心していた。実際に、彼は化学実験を行い、大学の化学講義にも参加していた。そこから、ルソーは『化学教程』というマニュスクリプトを執筆した。

『化学教程』では、当時最先端の化学的知識がまとめられているだけでなく、彼自身の哲学、認識論、世界観についても記述されている。ある物質が、化学的手法によって、今まで持ち得なかった性質を帯びた別の物質になること。そして、その過程を把握すること。これがルソーにとっての「化学」である。すなわち、「ありのままの自然」をどのようにして「別の自然」へと変質するのか。これこそがルソーが化学に専心した理由である。そして、少なからずルソーは化学と政治の関係について思考してい

た。

「ありのままの自然」「理念上の自然」という対立に、「改変された自然」という化学的認識から得られた別の項を導入することによって、ルソーの政治哲学解釈における新たな側面を描き出すことが可能になるのではないだろうか。